

Foreward

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3742

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



巻 頭 言

馬 場 優 子

21世紀を迎えて2年目にして大妻コミュニケーション文化学会は産声を上げた。20世紀も21世紀も自然の時間の流れから見れば連続したものだ。しかし、現代社会の我々はその間に人為的な断絶・区切りを設け、自問する。新しい世紀はどのような時代になるのだろうか、と。

現在、日本をはじめ諸社会が迷走状態にあり、100年先の展望は言うに及ばず、数十年先の見通しすら困難である。多くの人には不安と若干の（虚しくなるかもしれないが）期待と希望を抱きつつ、与えられた「生」を懸命に生きている。その中で見えてきた止めることの不可能なものは共存・共生であろう。とりわけ自然環境との共生と地球規模での様々な人間集団間の共存は不可避である。だが、いずれも私達が思い描いている以上に困難を極める課題だ。

人類は自然環境に働きかけて再生産過程に介入するなど自然界を變形し、文化的環境を作り上げて生きてきた「種」である。「人間が棲む」こと自体、自然環境の破壊を意味するといっても過言ではない。人類がヘゲモニーを握り、自然界の、人間にとって都合のよい側面を保護することが真の意味での自然との共生とは言えまい。同じことが人間集団間の共存についても言えよう。

globalization という極めて general な言葉を旗印に各方面で全地球化が進行している。20世紀に非常に重要な意味を担った国家の壁は影が薄くなってしまった。しかし、歴史、宗教、伝統をはじめとする文化や、身体形質の類同性を基準とした population という意味での「人種」の差異は厳然として存在し、それらを基盤にした人間集団は健在である。如何に強力に物理的な globalization を押し進めようとも、各集団の mentality まで全地球化して秩序と調和に満ちた世界を招来することは難しい。なによりも各々の集団は ethnocentrism（自民族・文化中心主義、自民族・文化優越主義）を持っている。如何なる集団と言えどもその誇りが軽視されたり否定されたりするのは

堪え難いものであるということは歴史が証明している。強者の論理に則った「秩序」は人間社会の共生の本来の姿ではない。真の共生にはコミュニケーションを高めて調和を図ること以外にはないだろう。当学会が標榜している「コミュニケーション文化研究」はまだアカデミズムの中で認知されている訳ではないが、社会的、歴史的に極めて大きな意義を担っているのである。

communication という英語そのものは日本語への置き換えが困難な概念である。伝来した外国語を受容する時、それに対応する日本語に創造的に置き換えることなくカタカナ文字でなぞった外来語が第2次大戦後氾濫しているが、その理由の一つは、必ずしも意味の厳密さ、正確さを要求されず、漠然とした曖昧な意味を運べるので、用法上、便利さや容易さを伴うからであろう。communication も現段階ではいたずらに厳密な定義を求めず、広義の用法を踏襲して人々の想像力や創造力をかき立ててゆくほうが分野の性質上、有用なのではないだろうか。

人類学・民族学においてはコミュニケーションは「交換」の意味で用いられることが多い。Claude Levi-Strauss は、人間社会はヒト、モノ、サービス（労働提供の意味）のレヴェルでのコミュニケーションにより組織化が始まり、“自然状態”から“文化的状態”へ発展したという。この理論に立てば、コミュニケーションは全体文化の中の一要素ではなく、文化そのもの、あるいは文化の存立基盤ということになる。

当学会の設立母体であるコミュニケーション文化学科は異文化コミュニケーション研究とメディア・コミュニケーション研究を柱としている。前者は、アメリカで海外駐在の外交官に対する異文化交流・折衝のための訓練を目的として発生したとされているように、現実から出発した分野である。どちらも初めに事物、事象、あるいは実践があり、その観察・分析に基づいて理論構築を行ってきた。この二つの分野を当面の柱とする我々の「コミュニケーション文化研究」は、一つの tool である外国語の習得のみに矮小化したり、実学的応用部門、即ち“how to”分野と規定すべきではない。あくまでも“what”、“why”の基礎学が前提であり基盤であって、それを応用的に発展させることを意図している。

当学会の教員会員の顔ぶれを見ると、specialist と generalist が混在しており、また、理論に傾いた者も応用に傾いた者も揃っている。仮に二次元の座標軸に「理論－応用」と「specialist－generalist」を置いてみると、教員達は

四つの象限に程よく分散するに違いない。今後、時代状況に学問研究はどうか対応してゆくべきか、その中で我々のこの分野はどのような使命を担ってゆくべきか、を四つの象限の *integration* (統合) の方向で考えてゆきたいものである。